

## 論 文 要 旨

博士論文題目：元禄赤穂事件における「義」の観念について

氏 名：小林 加代子

本稿は、元禄赤穂事件にまつわる事象を通観することで、日本人の「義」の観念について考えるものである。赤穂四十七士は、その討ち入りが武士として倫理的に正しい行為、つまり「義」であるとされ、「赤穂義士」と称される。そして「赤穂義士」は日本人の道徳性を示すモデルとして存在している。

赤穂四十七士の「義士」としての姿が、『仮名手本忠臣蔵』などの近世「忠臣蔵」作品によって決定的となった一方で、事件発生当時は、彼らを「義」とするか「不義」とするかについて儒家たちの中で大いに議論された。しかし、「義」とは具体的にどのような倫理であるのかは、いまだ明らかにされないままである。

本稿では日本人の「義」がこれまでどのような価値観として認識されてきたのかについて、その思想的背景を追った。

第一章では、「義」の基本概念の把握を目的として、近世武士道書における「義」の用例を取り上げて検討した。それらにおける「義」ないし、同様の場面で使われる「義理」とは、いわゆる戦闘者としての正直で善なる行いを指していた。それが武士の倫理として自覚されるに至ったとき、主君からの「恩」を前提とした「忠」の意味も含まれるようになったと考えられる。

以上を前提として、第二章からは元禄赤穂事件にまつわる「義」の表象を分析した。第二章では赤穂四十七士自身が打ち出した「義」について、第三章では赤穂義士論争を題材として「義」について検討した。

まず赤穂四十七士における「義」とは、亡君の意志を継いで「仇討ち」を行なうことであった。それは、これまでの主君の「恩」に報いることが家臣の役目、つまり「忠」であるという認識の上で行なわれるものとされる。また、赤穂四十七士自身がこのように打ち出した武士の「義」は、世間一般でも自然に受け入れられるものであった。

次に、赤穂義士論争においては二つの立場があった。たとえば林鳳岡のように赤穂四十七士を「義」とする立場では、「忠」を武士の倫理と捉え、「法」によって裁かれはするが予め制御されるようなものではないとする。そしてそれは、赤穂四十七士自身の意志とかなり近いものであった。

一方、「義」ではないとする立場においては、赤穂四十七士の「忠」などは基本的に問題にはされない。それは、大名と家臣との関係性に重点がおかれていないためである。たとえば荻生徂徠の場合は幕府下において、太宰春台の場合は藩の構成員としてのあり方が重視された。

前者における「義」とは、君臣関係が絶対的なものであるということが前提となっており、そこに存在する倫理規範を互いが自然に了解していることで成り立つ。そして、それは主君への盲目的な献身から発する行動ではなく、あくまで規範意識として存在していた。一方、後者における「義」は幕府なり藩なりといった特定の集団を成り立たせるための規則であるといえる。同じく赤穂四十七士の「義」に

ついて論じたものであっても、以上のような立場の違いがあった。

続く第四章では『碁盤太平記』、『仮名手本忠臣蔵』を取り上げ、この二作品における「義士」像を観察した。このことにより、赤穂四十七士を「義」とする価値観の輪郭がより明確にされた。これらの作品では主君の「恩」に報いるためであれば命をも捨てることを「義」とする武士たちに共感し、自身でも同様の価値観をもって生きようとする一般民衆の姿が描かれていた。つまり、ここにおける「義」とは近世日本人全体に共通する重要な倫理として捉えられている。だからこそ近世「忠臣蔵」作品は、武士の「義」と一般民衆の「義」とが各々の目線から描かれながらも、共通の価値観をもった物語として成立した。そして赤穂四十七士は万人が共有する「義」を貫き通した者として、「義士」と認められたのである。

ところが、時代が下って、主従関係における「恩」の自覚などを前提としての倫理観が必ずしも機能しなくなった。しかし、それでも赤穂四十七士は「義士」と呼ばれ続けた。

その背景を明らかにするために、第五章で真山青果『元禄忠臣蔵』を取り上げた。本作品では、それまでの「忠臣蔵」では是非を問われずに「義」とされてきた事象に対して、大石内蔵助たちが都度その倫理性を吟味する場面が描かれた。

『元禄忠臣蔵』における武士の理想とは、まずもって「最後の決断は、抜いて切る」ことにあった。しかしながらそれは「侍ごころ」と呼ばれるものであって、「聖賢の教え」とは根本的に異なっていた。その上で、「日本の武士」は「侍ごころが第一」とであるとされた。

つまり、赤穂四十七士を「義士」と呼ぶとき、その「義」とは日本人が古来より培ってきた倫理観が前提となっており、それは、儒家たちが治世を前提として説いた「義」とは異なっていたことが、本作品で自覚されるのである。

以上のように、元禄赤穂事件を題材に「義士」像の変遷を通観してきた。これまでも元禄赤穂事件に関する研究は広汎に行われてきたが、元禄赤穂事件の史実そのものの評価、赤穂義士論争における評価、そして「忠臣蔵」における評価はそれぞれ別のものとして論じられる傾向にあった。「義」がどのような価値観であるのか明確にされてこなかった要因はここにあったといえよう。

「義」とは近世の民衆による伝統的武士道の想起という一義的なものではない。「義士」像の変遷、そしてその根拠となる「義」の意味内容を特定しようとするには、その時代や行動する時代によってどのような変遷を辿ってきたのか、その複合的な思想的背景を追わなくてはならないのである。本稿においても、赤穂義士論争、近世及び近代「忠臣蔵」作品の分析を通じてその一端を行ったが、さらなる分析が要されるであろう。

以上